

今昔物語と下野薬師寺

—長寿・極楽往生の話し—

下野市教育委員会 文化課



人間のエゴイズム・人間の信頼をテーマとした、黒澤明作品『羅生門』の素材とされている芥川龍之介の「羅生門」。「藪の中」の更なる素材が、平安時代に編さんされた『今昔物語』であることは、多くの方がすでにご承知のことと思います。中学生になると国語の古典の授業で『今昔物語』の「馬盗人」などを習いますが、その中で取り上げられる題材の多くは、「今は昔・・・」とあるように貴族や平安京（京都）を中心とした物語の内容で、遠いところの昔話としてピンとこない人が多いのかもしれない。しかし、実は下野市に所在する「下野薬師寺」に関する記載が、この「今昔物語」に記載されていることについては、多くの方は知らないことと思います。

下野薬師寺の堂童（寺の雑用に奉仕する人）である藏縁は、日夜地藏菩薩を信仰する行者でもありました。藏縁が三十余歳の頃には、家も豊かになり家族も増えました。この頃、彼は等身大の地藏菩薩一体と堂を建立し、毎月二四日には人々を集め供養をしました。日頃から藏縁は、「私は必ず何時の月かは解らないが、二四の日に極楽往生する」と宣言していました。人々は最初、これを笑っていましたが、九十歳になっても元気なことから「珍し

いこと」と言うようになりました。

延喜二年（醍醐天皇代、九〇二年）の八月二四日、藏縁は遠近の知人を集めて饗応し「皆さんにお目にかかるのは今日が最後になりました」と挨拶しました。人々はまた、いつもの話だと思う人、別の涙を流す人といういろでしたが、皆はそのまま帰宅しました。その後、藏縁は地藏堂に入り、合掌して坐ったまま亡くなりました。翌朝、人々はこれを知り、極楽往生されたに違いないと感嘆しました。

このお話は、「日頃からお地藏様を信仰したお蔭で長寿を保ち、極楽往生を遂げることができた」信心深い話とされています。

この物語から、約千年前の現在の下野市に九十歳を超えるご長寿な方がいて、その人は薬師寺の雑事にかかわることで国立寺院機構とつながりを持ち、さらに個人資産で仏像やお堂を建設し、場合によっては薬師寺から僧を呼んで法会をおこない、法会の後に人々に飲食が饗応できるほど裕福な「富裕層」だったことがわかります。

ここに記されている「地藏堂」が下野薬師寺周辺のどこにあったか知る由もありませんが、下野薬師寺跡の北西で

「三味場」西側の雑木林あたりは現在も「地藏山」と呼ばれています。その北約一キロメートルの上三川高校周辺の工業団地造成に伴う発掘調査では、土器に「佛」の文字を記したものと僧が托鉢の際に持つ「鉄鉢」形の土器が九×三の長い特殊な堅穴建物跡から出土しており、ムラの中に「村落内寺院・堂」があったことがわかっていきます。もしかすると藏縁さんがいたのでしょうか？

秋の夜長に古典を楽しみ、名画鑑賞はいかがでしょうか。

参考文献：『南河内町史資料編2 古代・中世』一六四ページ

